

---

## 謝 辞

大 場 昌 子

ソーントン不破直子先生は、1983年4月に専任講師として本学英文学科にご着任以来、28年間の長きにわたり学科および本学全体のために献身的に務めてこられた。先生はその抜群の行動力で、どんなときにも率先して骨身を惜しまずことにあたっていらした。そんなソーントン先生が本年3月をもってご定年で退職されるということは、私たちにとり未だに信じがたい気持ちで一杯である。

先生は、学科ではアメリカ文学の分野において多くの学部生、大学院生を育てられた。大学院で先生のご指導を仰いだ学生の中には、現在アメリカ文学の研究者としての道を歩んでいる人も少なくない。それ以外にも、英語で論文を書くための授業を長年担当され、教育上の問題点や改善点を積極的に提示してくださるなど、学科の英作文教育にも大きな力を発揮された。また、文学批評に関する深いご学識をもとに、学部や大学院で批評理論についての授業も担当してこられた。学部の「文学研究入門」は、先生のご発案で設置された科目であり、この授業を受講したことで文学の面白さに引き込まれた学生も多いと聞いている。私も先生が最終講義とされた「文学研究入門―最終回」をうかがう機会を得たが、世界文学という最新の文学研究動向を踏まえた上で、現代世界では文学は国や文化の違いを容易に超え、広く人々が共有できる状況にあることを実に明快に説いていらしかった。文学少女を育てたい、という先生の熱いメッセージが、1年間の授業を通じて学生の心に強く届いたことは疑いない。

---

大学全体におけるソーントン先生のご貢献も非常に大きかった。近年のことだけを取り上げても、先生は「リカレント教育・再就職システム」を立案され、それが2007年度に文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育事業委託」として採択されたことにより、文字通りゼロから本学のリカレント教育組織を立ち上げ、マネジメントの一切を取り仕切ってこられた。同システムは2008年度からはリカレント教育課程として本学の教育の特色ある一端を担っているが、先生のご尽力がなければおそらく実現しなかったであろうことを考えると、先生の熱意と行動力の素晴らしさにただ感嘆するばかりである。

研究におかれても、もともと比較文学を専攻されている先生の研究対象は広範である。アメリカ文学研究では主として南部文学を論じて学会で活躍してこられたが、ギリシャ・ローマ神話から現代の日本文学、さらには西洋哲学にいたるまで、先生の学問的ご関心はとどまるところを知らないというのが事実である。そして、そうしたご学識の基礎となっているのは、先生の優れた英語力であることも忘れられない。

ソーントン先生は、英文学科の良き伝統の厳格な守り手であると同時に、時代を見据えた改革者でもあられた。大学院生を前にして「こんな面白いテーマをみつけた」と楽しそうに話していらしたご様子も、とても先生らしいものであった。教育にも、研究にも、そして大学という組織を通じての社会貢献に至るまで、まさにスーパーな力を間断なく発揮してこられた先生の強く熱い姿勢を、私たちはぜひとも受け継いでいきたいと思う。

これまで私たちに多大なご教示をくださったソーントン先生に、心から感謝申し上げ、謝辞とさせていただきます。

---